妙竹林話

七編人

14
3157
50(13)

14
3157
50
(13)

[illegible]

紋

滝亭大人ハ樂人を八人の連となげ。
まゝ和合人ハ六人ハ笑ゑ家と集一清
穢酒蔵の妙とまゝ人と笑ゑし後の波
とゝらぐゝ高しゝ茶先社浦ゝし
八人と六人社中ゝ七人の懐慢りの戒引

出でて七偏人と名を付し放歌なる歌
を云とのゝしり寒集巻に人とおぼえて
晴厚面皮一部の狂歌出版肩
と変まゝすのゝ笑人や和合人の玉や金礼
元平人花小稿を七偏人嗚呼我あゞ抑強
しゝや安くゝ安くゝ貸をるし様

元の辞と力ふかつゝ恒り。陸と後と出次く。何
拍やらゝゝ出て出て出て。先此外を是陸りの大
尾長長清竹ゝ吹ゝ大きゝ息とつき。平
ゝゝ乾乾と金ゝ出ふ額の汗と拭ふゝ
此叙出とるゝ出ゝり

様　寺重譽

茶釜蚊

友とともに
来れ

芳春

妙竹林話 七偏人五編巻之上

東都 梅亭金鵞編次

○

青柳揺うゝ能楽亭丈、相も変らず茶目右虚呂松下右衛門助が、ちりて主人喜左衛門をそゝる色彩涼き秋の月の雨さへ打くゝり出て人の心の淋しきより品川付る百物語ふ大勇を驚して寄らんりのとと祝ふあるを拾りけゞ一番二番と順くに古怪談ときけまゞ一まゞ磯る焼火

と大爲が番ふあらうける級大爲ハ心淋れども濃く搾ぐ搾
燈のおふすまりて仏のやうんとなんとなくても孰向ハ分ん用り
果てるそのうちふ人のりのくこころる竊く産義を抜て行と
初めこび大爲ハ頻ていつりの癖「オホン」と咳をする拍子ふ
忽地ありを吹消せば「ハッ」とハ乃ちど詮方なくそのまま
手処ふ泡を綿ゆ目ざりをちくさせるぐ〳〵張て居ると
生憎ふを寺の鐘りの凄く霜ふすぐる〳〵法の声さいと淋
し弟ふ吹ゆまこび生き付ての臆病ものぐんく気味ぐるく

なり万一手処らの渦のもうう〳〵まい貢でも出やうとなん人
ト忽地珍元よりぞっとするわど怒悔なりまぢゆちぢめ五
人のものも元の席に居るし爲人ハ頻ふ尻おをしるぐら
「エ」表帝大人モシ表帝ゆ大人ぐ〳〵叙莫とし化りのくき
いぢやアはぜ〳〵やせんうとゆど逃辞をするのなけまぐいうく
うを弟味爲くなり少し階えまと尻ごと壁のもう〳〵貢を
出し耳をたたくそばざて〳〵「モシ茶ゆ大人エ茶ゆ大人とそうう
茶ゆ大人と呼うけてうえてまと階え「爲ハ近ごろ大人ゆれ〳〵

○エモシ〳〵と云るゞ〳〵藤の先を伸〳〵延出し〳〵こゝ此処ら不居
つてあるとめくあちこを探つて〳〵まど手先に障るものもを
まば〳〵ヲヤ維も居居〳〵ハテナ今まで此処不居こゝのガト新入記
まばかるゝど狂〳〵底弟味熱くなりすこ〳〵巻〳〵声吉不
て〳〵見さ玉法由大人こゝる津戦ハよ〳〵魂魄を冷のハ
寿命の毒ざるまサ底蓋とゝのめ〳〵エモシ〳〵と云るゞ〳〵を処
らと毒と不探りまつまど共森〳〵と考づまりて人の影勢
のゝざれば今まで此処不居こゝのゞ伝和して食云なつこゝ

とゝ〳〵怪む色より赤〳〵の毛穴ゞ一度不こちに〳〵〳〵と
有さきこゝより表をさこゝるゞ〳〵なるまばもゝ〳〵ちの揚と逃
出さんと元ハ毒まとても先ゞどゝより逃ぎりまつ〳〵暗
冥不伝方ゞ伝和ゞゝ冥方をしるひて処らとゝやこゝ
不稀まつ〳〵探りまつ〳〵と指さ元〳〵ぎゝゝと障るハからら
紙の引手の穴ゞ穴ゝつと息そのまゝ垂れ可あゝて新
を突ゞ〳〵ゝ方此〳〵方を足まど矣紙黒膝不歯れ根
ゞ金ゞ長〳〵声ゞ〳〵モシ玉法由大人こゝる〳〵〳〵やこゝを表

のゝゝの胸ゞ苦しく痛んで来てこまきくと呼びたて
も更ふ庶幾のこのこう自己ゞ声はさ〳〵伝とうく四辺〳〵窓
きて今までとゝ異なるやうに感ずるべ〳〵不景気の伝
ざらうと有の所う〳〵飛着〳〵伝ふしても出拵る名案
る家ふ長居〳〵無用早く表へ出て〳〵のゞトいひてまこも
逃出し天窓の先ゆて行やゝんあり例せばぷつりト天窓へ
冠さるのある級へバツとゆゝと魂魄も消いるごとく驚ける
ゞ伝ゞるまでとうてもえ支なりふ編んどうりふ表へ天

窓へ手を差り探つてゐると伝やゝ〳〵物名を入れ来る器
をすつぽりかぶりしるまでば現ふ陪元居るし離まし物名
ゞ途中と舞ひ鼻の拍子ふ鼻へ吸ここ〳〵ハツクシャウ〳〵エのハツ
ノシャウト草芽ふすこ〳〵ふ気ゞ付まこと除くし這入出き天
窓とどこつくり向ふ〳〵打付〳〵ヒヤと浅へ〳〵拍子ひとぐこ
つくり脳ぷつと打まこまこも作天〳〵手作を処ふ天
を手へ忙然こて陪えさりしゞ伝て思惟〳〵手を出〳〵手を
らと除し探つてゐまこば見侍の押入まゆて逃ゆこうゞ〳〵

中間と小柳のあひだ〳〵天窓と突こと天窓の先でお柳あるを
用神を引るう〳〵神の中なる何やらの物を天窓う〳〵あ
びるうるとびやうや〳〵少〳〵落付て〳〵イヤ次の号ごとをいつて
迷出〳〵〳〵〳〵ひ処へ戸柳の中ご道理で声ご可怪〳〵ひぐく
開〳〵てこの物名へ何ごら〳〵〳〵ア先打揺揺と唱せとかう
手揺りのと揺へと小麦の物名ごナ。ヲヤ〳〵天窓う〳〵えり
う〳〵五体ぢう〳〵ご物名ご〳〵けごさう〳〵探りまう〳〵何ホしても
ひ処へ被振〳〵て迷こんごのご天のお助まとお寄ねる陰家

ごとゞ棚の中へまつぐりと迷入て固く成を編のうつかう
ぴつ〳〵やり隔紙をさつて居さりしご今ホも何やら
手を出〳〵て拭ひさとる成ひとる数物もつご成を張さんと
手処らゆ辺を探探ひご紙のやうなる茶のうるさうのご来れて
ヤげて色々何やら〳〵ねど外して元天窓のよう〳〵除を
冠り息をとろうて浮腫なるこ〳〵ず〳〵して小丸変ホい
表名物ちでめゆ人のものご縁て振へ迷さり野菜持物を
びる〳〵の道具ごてゆて成を振へ何物ごう〳〵法ごん甘く化

ゝらゝ〳〵と笑ひ流す一ツ目子僧が出来ると是は〳〵さア青鬼
の夜叉王様〳〵ソレ大きな声をあらあらイ茶を焙烹
らのいの処へ仕て茶を煎ぐ茶ッちやア茶が出せれ〳〵政自己
の二ツ目入道と下さんの未兎と義さんの義〳〵自己の
下道ゝゝもう茶をもう〳〵出来て居るのゞ茶〳〵何ンでも大
長めエ何のとして居るう茶を政〳〵仕て歌て来そう下丈〳〵歌いと
つて来ぬ藤吉ざるのョウたえるりのう茶〳〵目で歌つゝゝゝゝゝゝ
めゝゞ眞で現つて眞のゞゝ〳〵家子を眞れ〳〵ゝゝゝゝ渦

のそうゝ糸繰つて居るゝ遠〳〵れ〳〵何ンゝ来て母早く乳を
くゝちやア仕れ〳〵ナイ〳〵より最出来ゝり茶〳〵イヨ〳〵ゝらゝ
霜げゝ未兎九ゞゞ義〳〵政ゝのゝ二ツ目入道も化粧ゞて面
白ハト五人い打ゝり来ゝの仕ゝゝ不條合ハゝきゝゝゝゝ裏
にの声をゝあけて〳〵ゝ主人ゝ家ゝゝ四在ゝるゝゝゝゝゝゝゝゝと
り来ゝゝ彼家主の深ゝ情ゝゝて〳〵イヤ長い義時通守ゞゝ
元ゝ侯のゝゝ些兎打ゝ出ゝ影ゝ声ゞゝて居ゝゞト提灯出ゝて
四辺ゝゝゝ入ゝ〳〵ハテナ茶碗や燈州金ソレト明義ゝゞゝ入

此処ハあるとハ側の変化きとるゞ蕎麦ハかうと咳ハ
ゝとのゞナるんゞ気らまとるめゞれゝとゝとゝ
ぎハ出歩行をするとゝ傳ゝ屋敷を踏つけ引と仕方とも
ふりの。どゝ帰ゝて来るまゞ番をゝ長ゝ考ゝ万一ハのうの
危殘りゞ日主身ハ持ゝて来るゝ日初ヘヤゝ謀ハ世話の
ゆけと蓮葉花子ゞ国りまると提灯の灯を行燈へらう
きゝゝ人苦の新へ見ハ外の形ゞ無エア油の高いのハ此報な
ちい焼石を六筋入まゝ急ゝ初ゝずゞ何処の国ハ

色りのゝ者一ハの用石日ハのワト小云ゝゞ行燈と燈
ゝ自色ゞ持ゝゝ提灯の燈とフと吹消ゝ出ゝの上の時
長ゝゝ燈竹色ゝ仕ゝ出ゝ一人ゝゞとゝ薫ゝ世長ゝ者概の
ゝもハ波大長ゞ臭ゞとゝゝて縛り長ゝと濃ゝゝ初れ
と対表ゝ来り行燈ゝゝ人ゝの家子に少ゝ色い長竹りの
ゝゝ稲表屋神ゝ主人のりの声ハ少ゝ日ゝ乃ゞるゝ表花ゝ
変化の出来ゝ人ハ神ゝりゝと乃ゞるのゝと長ハ恐ゝさ
深ゝさゝ此代表ハ人癖ひ長ゝ的波方の小産表ハ

一日小僧二の目入れ木兎外道青鬼と化の物らく出来
そうへば茶へサア〳〵一日小僧ぐ出ようけうゝ食も喰はそ出て来
るせ〳〵ト言葉の通意へ向目ぐみの偏偏とり湯殿へ歩
汲さるわる茶を茶意へおて畑意〳〵茶ぐらと女の手に接
げ先へ行ば此人い湯方ホつの人掃頭より除と所女のおと
改くゝ漆子ホ吹りぐさーて長板 義人へヤゝと新り会
て廃おこ乃ーさびホ耳へ口とせ茶へ化れして明ると有
らう義へ漆ホ化も黒ぐ湖ぐるア茶へそーて明りと有る

くまこへぢやア舟義ホ考つとーてホ長板へ沢ぐトきへホニ物ぐ
義決へ向ふホも一ト瓶向あるのぢやアねう茶へ五のつも知きねヨ
故へ化ホ兎もあれ見までホ考さりのぐ構ゝ出りけてこるる
せへナ茶へ出うけゝホ出うけうぐ二ぶ美の化ものが自己達より先へ
顕つまて長るのぢやアねうと必ゝう些と効除るところ
ぐ出らアる義へまさう右拍しと理屈もあるへトきへぐぐゝ
考て居て効ぐゝまると性ねへせ虚へ必ひきうて巻うて
見ねへナ茶へ化さる構ゝぐ出うけて見やうト見を化ぐて

ちよこ〳〵と稼の板男を歩行るゞ〳〵陸子の様へ見とゞ様
さらりと明て社会へ這入彼猫者を突いゞ〳〵大丈と仏
源氏湯が飛りあんぐる鼻の先へ数〻〻棒に茶者を見
つけ茶〳〵お客さんお茶とあァゞれと云るゞ〳〵舌とべろりと
出して元きとど此家主の源氏湯ハ辛忽きゞ持まへお
まバ一向ふ気ゞ付ぞ源〳〵ヲヤ〳〵お前守うと思つて〳〵美人
お家にハ在ざつて〳〵開てお客でも来やァ来まへ〳〵猫者
イヤ猫ゞ〳〵及ぶめ〳〵とりゞ〳〵ゞ方も例の辛忽者向ふ

の云端ハ耳へ這入らゞ〳〵早〻変化の姿を人色〻と仏振
をしてもちつゞ〳〵ゞ通つて元てもゞ気ゞ付ぞ源〳〵時ハ源氏さん
今〻秋とうとこの〳〵外でもわ〳〵他所で催〻の茶番の世話役
を特まれこのゞ〳〵毛非〻〻〻〻さんハ出若男をうけゞ
けつてやァ成わ〳〵紙ゞ〳〵とゞ云ても構ハゞ〳〵茶目者ゞ明りの先へ
顔つき出〻〻〻ひゞく〻大声ゆて〳〵りとちりとちよこと牛の
鳴真似をゞ〳〵るゞ〳〵天竺とうりべろりゞと舌を出せバ源
氏湯ハ時ハまとうて〳〵キャアッと云さゞ両手を伸一生

殺令ト茶目吉ガ胸のところと突のめせば茶目吉ハ
ト茶目吉〳〵茶吉も茶うんも投り出シ作何さわに
筋斗藤子のところ〳〵ぬぐるも忍藤子ハ外まて尻隠
尻隠〳〵彼方此方へ例ふたほと後辺ふねつきり御くる
るこツ目入道吉鬼みぢく外道の変化も飛んぐろ
跋ろり跋ぶりをしるぐ〳〵白眼まぶ老らでも元の一ツ目
ふ勝の節ひゞがつろりと寛んで動けね涙ぶ流るれば
再び〳〵キヤアツと声〳〵手処〳〵ぢつろり顔例ろり忽地

生ゑとしるつろり藤ゆい色をとて猿猴あつて例
〳〵うけろり〳〵サア〳〵るゞ指まつろと〳〵イヤ〳〵大変ご顔例
つと眼をまつと〳〵茶目〳〵ヱヱ涙らね眼成まつ〳〵顔
例このごフ〳〵ヱ〳〵涙ぐんごろの影〳〵ろつさとせて
仕舞ハね〳〵と連中のこゝぢず掛り合ごア成チヨウ世張れ
ぬけこ行の眼るんぢをまつさずとも眞ふ乳の弱いにも
方ぶゞあらア茶〳〵行祝〳〵ぶるゞろ〳〵〳〵焼可を
吹うけこ〳〵バ眞ごろ〳〵茶目〳〵草刈さをぢゃアをめ〳〵一斗

して亡者と生醉ふ者〳〵行を拵めう和とやアーわ〳〵
大きな声で呼でこんやうト走りう笑とす〳〵〳〵
気ぐ付ぐらゝトこッ目入道一ッ目子僧未兎毛兎外
道の化りの小孫兎神の赤金羽とまくるまゝて
こさらぐ虚長松い勝ようり茶碗〳〵あと汲まり〳〵
見さ〳〵金ぐす報ふ根根るさんるぐ此を面〳〵吹うけ
こやアこ中気ふ敬ふ遠〳〵わ〳〵トちゝこうり翻とこんて恂
り走るぐ〳〵後ぎさり〳〵ヤア〳〵ちりやア源寺清の家わ

さんぐ家守さんぐ〳〵ナニ源寺清の家主さんぐ〳〵遠〳〵わ〳〵
家守さんぐワトき〳〵行報して此処ふ居さのぐらう〳〵大兎
の所代りふこさのうも知とわ〳〵ト〳〵次伝ぐ義絶の方代り
ふこさこうふるア〳〵行ふとも大騒動とゝ〳〵ぐり出〳〵
さワトき〳〵行ふ気付ふるりのイヤ侍よ少時の〳〵出〳〵に春
膚菜し郭切紙ぐ西てぐちやアわ〳〵う〳〵〳〵〳〵〳〵
行〳〵祝日あぐ〳〵ナワトさ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
大騒動とぐ〳〵る侍ふ戸郭の入口炮毒と持ゆきて

隔紙あけんとて手を持ぐるまりて張てもぐらちり
丈へてはねも道理ぞ物のうちゆへ彼大兵ぐ今原善蔵の
倒とする声ぶ恐り作天〜両手を伸し隔紙と一生懸
命押へて居ると思ふ〜ぐれば表座敷ゆへ表ぶ放て推て
も〜て思ふ少しも動ぐる隔紙ぶ茶目さん下さん手
伝て〜ぞうて長んわへ伝ぐ丈へて些も動わへ茶めさと
承知ぐソラ〜〜と下さへまも〜一所ぶ考らすう〜〜トこ人
一度ぶ隔紙の掾へ手をうけ〜動まぐ大兵も新と考めら

歯とくひ考ぐつくり一生懸命両の手足で押ゆとど力
つくまて死落〜〜とひきとる隔紙の内ぶ入りぬつと
面を出すと大兵へさるぶ風呂ぶ例して冠足ぶ表の格ぶ
天窓ぶ新〜勿論の有う〜〜腦へ表白ぶ髪のうへぶ
毒虫ゆぐ表ぶ表ぶ迄ぶ千鶴の東に表ぶ表ぶ打冠まぐ
千ぶ表世に〜人白粉地蔵へ拝子と表せるぐ〜〜ぶ表
のの〜長元と落りて波方へ辻出さんと半紙の伸より表
出ぶと大兵ぐさぶとつくるぶ表ぶ善蔵ゆ茶目表下太ゆぐ

一度にハキャアッと腰を抜そのまゝ平伏ハ大長日外
るる二人ゐ一ツ同ホ偽外道の変化まと本兎の化りのに
然ゐ敷をゐるゐり日用ドく〳〵キャアッと類例に人の者の
声ホ驚き此方に乙漏つく虚長松羅助ハ行ごく〳〵ゐ
ゐ〳〵〳〵戸撫の例ハ徒てゐまゐ八蟇兎卯茶目表下太卯
ゐゐつきり千処ハ尾俤つきゐと行やらうどめ〳〵眼
ゐり散眼〳〵光らゐて乙に向ゐ〳〵抜さゐる級
虚ハ行ごのウ不景気ホ眼付をゐて手振る魂振い

懐ゐ好ハ〳〵ゐ迄ハ白髪の圓といゐのゐと早く出ゐて張せ者の
ゐ行と可笑ホ表仙をゐるのゐ〳〵ゐて乙処ホ例ゐる
大長ゐ長ゐ長ゐ長ハだ遠つけ迄ハナヤ行ゐ雑の長ゐゐと後と
ゐりむゐ眼ハより〳〵雑ゐ此処に座て乙ゐるの乙遠ゐりけ
ハて雑ゐゐ〳〵ゐと乙此方の虚長松ゐ〳〵ホン三行ゐ数ゐ所
ハて乙ゐると二人ハ例ハ五ゐりて大長ゐ乙処に例ゐる新
を明ゐりに眼をゐむゐと小表の務名ゐ乙千鮫ゐて長ゐ
長歌にハ乙ゐる面ゐ乙絶ホ乙ゐる折ゐりに歯を噛ゐ

り眼をあけて二人を白眼ばかりにらみつけ虚空を払ひ
政助も一眼ねぶりより〳〵キヤツと声をあげ一度に後方へ倒
れ枕子に折うく政助の手先ゞ側まで涙を流の
あくりと突きくるしと涙を忽地正気付〳〵うとうと
記えうり行くうちのまうしうじの周章うろうろ
あわり倒つ悲の一生懸命表の方へ逃出ーうり
○あくるまで悲ろ乱れと飛八八今朝まぶたより二人と
門後前の海手なる大師江の元除大師へ参詣
さんと出行ーゞ秋の日脚の短き小雨さへ折〳〵降出ければ
道の行くも敢果ぶ〳〵此時漸く帰り来り一歩機嫌
の高声小〳〵草刈さ〳〵自己ア出さうう口の方ぶ
と遠方へ出ぬ雨小降れるとおびに従て女に揺れる
〳〵行方ぶ宜ぶらう乗へ行方ぶ宜う自己山や分ら乗
ぶ〳〵秋ぶ小雨ぶ一度揺ぶ乗ぶ〳〵ぶ生涯と
りてぶり春ぶう〳〵ぶ雨ぶ揺ぶるとうう
味をまぶ〳〵ねへの小雨ぶ揺ぶると大師さま

三宝美子
芳光

の罰で日蓋て来さうなものとおもつて又仏教と仏教(ニ)仏教も
おしづつ寄て支度すべし仏教と釜こしに仏方が押ぎはをとろ
仏教のもつ味噌汁が強らうて釜の方へ仏がつまいのサ
イヤ仏といやて高橋に居と牛い強らうとるア仏へ九に牛で公
ひ山ーとゞ連中ー能楽亭小集つて居ぐらうるア仏へ行ア
仏教に決ぐ牛と云れて連中をとろへ出ーとのぐ仏へ別小右
車来賀ーわ仏へげとぐ食のの〜と居所が牛のやうぐ
う〜ョ仏へ遠へわ仏へ仏教ぐうけ嫌所で馬の影が居まるとも

のことを名人出ーとけ仏へ此時ア仏へ草刈て居ぐうーとぐ
けるみとゝ云ーう仏へそんうーとけ笑うて来らうふ連中い義次
さんの和に集つて居に遠へあるめ仏へそりゃアうう仏へ
出来わ仏へ相撲でも付て居に遠へわ仏へのサ仏へ自己とあうと
あれわど食を強ーとのふ仏教も此奴も不仏教なる奴ら可
つぐうーとぐさだうり云て居て来流不性わ仏へのい宜が面
降出ーとのうんうーう仏へ寝生が悪いうーとぐ
とう天りんを知ーわ仏へうーぐーとう澤をのそとるに遠へわ仏へ

何ぞうめへ魚肉をて自己達日一所不住宜うこと義せ
て来りてくりんざへ何さま仮名を考へ長地不されさりし
考ちやア可怪くね。ア侍ヨ。てと彼振ざうまもへ
ア〳〵侍ヨうで彼振ざう〳〵ア〳〵まもへといてふた花
のへ赤振ぢやアねけとど一緒肉つけやうと云へうう侍
ヨ彼振ざう〳〵まもへと言このヨ赤振久千住の先
ざうへ赤ヨ物へ赤ア物へ考ヨアへ金を捨ることと云ふぢやア
ねへへ赤れと云まると落めへざう〳〵女不惚られと稼り不
考ヨ方が宜らへ赤遠へね赤おぐ二十六の年場で自己が
十七八の新造ホ為へ村まことのそへ赤自己の方
ぐへ赤新造好のする風ざう〳〵へ赤イヤそのもとこそにたりやア
赤八さみふど丈一天に海苔帰物法お丈へで惚ざアへ
南無物至極へうくまんげ組へ赤へ赤損徳の村担へうちに
力不さんのお仏敷へ赤て仕舞こぜへ赤何不七日二人あざ〳〵
女不惚らまて大変の波の仏で絶と出新たうに放さうへで
此主意うんぞもみんな業つて赤このへこのへ赤へ赤さうよ脱日

うぶ後員くたの女の家へ推つりれて来さるども貢ぎやアれ〳〵ト
二人りへうろく森屋伊の家のあまぞ来りけるとぶ猶門に不徳て
ぜそく統内とて雪打うち内より格子を瓦落なれ〳〵あけ飛
ぶ〳〵る源吉清ゥ伝右ゥ衛門と推ぶ七ゥ源ゥ右ゥ衛
にかうて突あくれば雑兵七お〳〵ほんのあり内ひわひくる飛〳〵ぶ
顔〳〵類とコツキリ打つけ推ぶスイタ〳〵飛〳〵スイタ〳〵源吉清ゥ
むくもぶ源ゥ次のうちくたかけこけ。
七偏人五編の上 終